

# 5つの石

alice

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

————— 錬金術は物質を理解、分解、再構築する科学なり

————— されど万能の業にはあらず

————— 無から有を生ずることあたわず

————— なにかを得ようと欲すれば

————— 必ず同等の代価を支払うものなり

————— これすなわち錬金術が基本、等価交換なり

————— 錬金術師に禁忌あり

————— そは人体錬成なり

これ何人も侵すことなかれ

えー、要するにオタクです。

週一で投稿できたらいなと思います。

これ関係がダメな人は、ブラウザバックお願いします。  
末永くよろしくお願いします。

# 目次

設定	作者より	1
旅の夜明け		
第一話	冒険の始まり	6
第二話	新しい錬金術師	12
第三話	受け継がれし者	20
第四話	旅の始まり	24
第四話	アエルゴへ？	28
エドが錬金術？		34

# 設定 作者より

【登場人物】（主要人物のみです。物語のなかでしれつと出てくるかもですが、ご了承ください。）

原作キャラもいますが、その説明は省きます。）

シル・エルリック ・ ・ ・ エドワードとウインリイの息子。

父思いで優しい。（ウインリイの血かな？）

エドそっくりでちび。

性格もエドと一緒。

しかし、優しいところは、ウインリイに似ている。

少々おっとりしているが、時々エドの血を感じる。

アンテナもあるゾ。

イシユバルで、右腕を失った。

物語の中で、国家錬金術師の資格を取る。

一人称、俺。

エリー・エルリック ・ ・ ・シルの妹。ウインリイそっくり。

機械にめっちゃ強い。

スパナはよく飛んでくる。てかジャンジャン飛ばす。

シルの義肢装具士。

機械鎧の研究者。

年齢は、12歳。

一人称、私。

ゴード・レイ

・ ・ ・ 国家錬金術師、青の錬金術師。

年齢は、(こらー！ー！)すんません。(

手厳しいが、本当は優しい。

階級は大将。

一人称、わし。

シラ・マスタング

・ ・ ・ ロイの養子。

一度、国家錬金術師の試験を受けるが、

不合格だったため、今は錬金術の勉強中。

よくシルの事件に巻き込まれる。

シルと同年。

イン・サル  
一人称、僕。  
．．．シンの人。錬丹術の使い手。  
リン・ヤオの使いだと言っている。

推定年齢、18歳。  
その他不明な謎多き人。

ミサ・ホークアイ  
．．．リザの子供。

銃に関してはピカイチ。

そこそこ錬金術が使える。

防御系の錬金術が得意。

軍属で、中尉。

年齢は、二十歳。

一人称、わたくし。

【シルの研究】

俺は、アルおじさんがやってる、手を合わせる錬成をやりたいと思って、  
ずっと研究していた。

そして、おじさんが出来なかった錬成もやってのける研究が、

完成した。それは・・・

ハーフサークルアルケミストグローブだ。

円だけ書いてあり、記憶の中の構築式で、物を錬成することが出来る。

アルおじさんが出来たのは、ここまでだったけど、俺は違うぜ。

なんと、知らない構築式は、その物質に触ればわかるようになってる。

ちなみに、このグローブを作った俺じゃない。エリーだ。

というか、俺の研究資料を読んで、たった、こんだけの

情報で、勝手に作りあげちゃった。

すげーと思うぜ。

ちなみに、このグローブのしくみは・・・

コラ！ネタバレになるからこれ以上言っちゃダメ！

・・・はあい

とまあ、こんな感じだ。

あとは、物語のなかで楽しんでくれよな！

ーハーフサークルアルケミストグローブについては、作中でそのうちふれると思います。



お楽しみに！

# 旅の夜明け

## 第一話 冒険の始まり

——錬金力を取り戻せない。

——ああくそ、やっぱアレしかないのか……

——よし、アイツにも話すか

.....

エド side

シ「父さん、父さん、起きて！」

ん？ああ、寝ちまってたか。また錬金術でも教わりに来たか。  
俺が家に帰るたびにこうなんだからよお・・・

エ「んあ？なんだ？シル」

シ「俺ね、俺ね、国家錬金術師になる！」

ん？いまなんつった？

エ「え？」

シ「だーかーらーあ。国家錬金術師になるんだって。」

エ「またなぜ急に？」

シ「父さん、いつも寝言で言ってたよ。アルおじさんを  
取り戻すときに錬金術使えなくなっただんでしょ。」

エ「お、お前、まさか・・・」

シ「うん、俺、父さんの錬金力を取り戻したいんだ！」

エ「はあ・・・」。

・・・いいだろう！

一年だ！

来年までに身に着けられなかったら、

家から放り出すぞ！」

シ「父さん！俺、頑張るよ！」

1年後・・・

シルside

シ「じゃあ、行ってくる！」

エ「おうよ！」

シ「父さん！」

エ「？」

なんだ？」

シ「受かるまで帰らないならな！」

エ「ははっ！ やっぱオレの息子だな！」

そういわれた俺は、にっこり笑って、中央司令部の階段を踏んだ。

ロイ side

アレから20年たち、私は大統領になった。

そして今日は、国家錬金術師筆記試験があつた。

リ「大統領閣下、入ってよろしいでしょうか。」

ロ「ホークアイ中将か。入れ。」

リ「はっ。」

本日の筆記試験の合格者が出ました。」

ロ「読み上げろ。」

リ「アーク・デイン、ミセラ・アース、シル・エルリック、

シラ・マスタング、マリ・ウイーン、計5名です。」

ロ「確か、シルとかいう子も15歳だったな……。」

で、シラも15か……。

誰が受かるのか見物だな。」

シル side

とりあえず筆記試験はパスしたぞ。  
よっしゃー！

明日は実技だな。

頑張ろう！

一日後・・・

ロ「では、実技試験を始めろ！

ここににあるもので錬成を披露するように！

ではまず、アーク・デイン！」

バチィ、と青い稲妻が走り、目の前に巨大なビルが錬成された。

ロ「うむよし！ではミセラ・アース！」

今度は氷から城のような建物が錬成された。

みんな建物系かよ、つまんねえな。

とおもっていたら・・・

他「危ない！」

誰かが叫んだ。

何事か、と思い、氷の城をみると、

今日のこの暑さのせいで氷が溶けだし、どんどん崩落していた。

やがてそれはミセラのほうに倒れ・・・

シ「危ない！」

俺は、とつさに土で壁を錬成し氷の雪崩を防御した・・・  
だが、

シ「あれ？」

俺の体は一気にぐらつき、

そのまま地面へ落下していった・・・

## 第二話 新しい錬金術師

シル side

・ ・ ・ 気が付くと、どこか見覚えのある天井が目に入った。

ロ「やあ、起きたかね？シル・エルリック」

シ「!!」

驚いて起き上がったが、力が異様に入らない。

ロ「鋼のに教わらなかったのか？」

今のお前は錬金力不足だ。」

習った。錬金力不足になると、特に錬金術師は、多大な疲労を感じるという。

エ「我が息子はここかー。」

バンツと勢いよく入ってきた父さん。

ロ「鋼の。もう少し静かに入れないのかね。」

エ「いーじゃんかよ。別に。」

ロ「次それやったら、軍法会議で裁くぞ。」



懲役何年にしようか・・・」

エ「ナローー！やる気満々じゃねえか！」

そんなあほらしい会話もつかの間、

口「では鋼の。この錬金力不足の馬鹿をリゼンブルに連れて帰ってくれ。

発表は来週だ。」

シ「大總統、ありがとうございました」

それだけ告げて、父さんに担がれたまま、リゼンブルに帰っていった…

一週間後・・・発表当日

エ「おーいシルー！今日発表だろー。いくぞー」

シ「父さんも行くの？」

エ「ああ。万が一錬金力不足で倒れられては困る、だとさ。」

シ「今日は使わないだろ・・・」

エ「そんな文句は置いて、行くぞ！」

ア「兄さん待つて。これ持つてくんじゃよ。」

エ「ああそうだった。懐かしいな」

父さんが国家鍊金術になって、旅立つ日に持っていたという旅行鞆。

でも、その中身は、「見るな」の一点張り、見せてくれたことはない。

エ「じゃあ、いくか！」

シ「・・・うん！」

そんな会話を交わし、リゼンブールを後にした。

セントラル

駅「セントラルだよおー。セントラルー」

プシユーという独特の汽車の蒸気の音が駅に響いた。

エ「はあー。久々に乗ると、この汽車も乗りごごちわるいよなあー・・・」

シ「あはは、同感。」

腰を二人してトントンと叩く。ようやく一息：

と思つたら、

ア「待つていたぞ！エルリックの親子！」

エ「ゲっ！少佐が迎えかよ・・・」

ア「ぬう！もう少佐ではないぞ！」

あ、脱いだ。

そう、もう上半身ハダカ。

バコン！

．．．えーっと、何の音かな？

．．．ああ、やってるやってる、やっぱ嫌いなんだ．．．  
ア「痛いぞ、鋼の錬金術師。」

ちなみに、私の階級は准将だ．．．

エ「知ったこつちやねえ！」

はあ．．．

シ「父さん、行くよ…

発表時間きちやうよ。」

エ「おつといけねえ。じゃあな、准将」

シ「父さん、子供っぽいよ…」

エ「がっはっは！行くぞ！」

シ「まったくー」

三十分後・・・中央司令部

リ「よく来たわね。大總統執務室はこっちよ。

ついて来なさい。」

シ「ありがとうございます、中将。」

リ「ふふふ、私との時だけは、敬語はなしでいいわよ。」

シ「そうですか？ありがとうございます、中将！」

リ「順応速いわね。こんな人どっかにいたような…」

シ「何か言いました？」

リ「なんでもないわ。行きましょう。」

三時間前・・・会議室

ロ「今年の合格者は〇〇だな。」

軍「ほう、なかなかいいところを選びますな。」

ロ「当たり前だ。」

軍「で、二つ名は？」

ロ「案ずるな。すでに決めてある。拝名状とその他資料を準備しておけ。」

軍「はっ」

大總統執務室にて・・・

リ「ここよ。」

シ「ありがとう、中将。」

エ「ありがとう。」

リ「いえいえ。受かっているといいわね。行ってらっしゃい。」

・ ・ ・

シ「入ってよろしいでしょうか、大總統閣下。父も同席願います。」

ロ「よい、入れ」

ぎいい、とおもつ苦しい扉を開け、中に入った。」

ロ「ではまず、合否結果だ。」

ゴクリ、緊張するなあ

ロ「合格だ。」

ついでに今回唯一の合格者、そして、年齢制限ができてからの、

「最年少合格者だ。」

「・・・え？合格？

シ「やったー!!!」

エ「よかったな！」

で、これが拝名状だ。と言って、一枚の羊皮紙を渡された。」

エ「・・・粋な名前つけるねえ、、」

ロ「お前にだけは言われたくないな。」

エ「まあいい。」

エ「シル！お前が背負うのはな、、」

人一倍大きな声で、こう言った。

エ「鋼玉の錬金術師!!!」

### 第三話 受け継がれし者

エ「鋼玉の錬金術師！」

実感わかないなあ、なんて思っていたら、

口「やはり鋼のの息子らしい二つ名がいいと思つてな。

そして、実技試験の時の勇氣、心の純粹さからなずけた。

鋼玉は様々な宝石のことを指す。

その様な、色々な、そして純粹な心を持つ錬金術師になつてくれたまえ。」

ここまで言つたとき、大總統は父さんに目配せをし、

父さんは絶対に開けるはずのないカバンから、

何かを取り出した。

シ「……！」

よく、俺にホムンクルスと呼ばれるものと戦つた時の

話をしてくれた。

父さんの書齋には、赤いマントを羽織つた父さんと、鎧の姿をした

アルおじさんが写つた写真が立てられていた。



父さんは、アルおじさんを取り戻す前にマントを直したということ、オリヴィエさんから聞いていたが、その理由は誰に聞いても答えてくれた試しがなかった。

そのマントが、今、父さんの腕の中にある。

エ「——なんで、誰も教えなかったかわかるか？」

首を振った。

エ「これな、——お前が国家錬金術師の資格を取ったらお前に渡そうと思っていたんだ。

いつか、これをもつに相応しい人が現れるまで、カバンは開けないと誓ったんだ。」

シ「……俺が、相応しいってこと？」

エ「ああ、だが、これだけじゃないぞ。」

そういうと、ポツケから、血だらけの銀時計を取り出した。

ロ「……本当に、いいんだな？」

これを渡しても。」

エ「シルさえ良ければ。」

そうして、俺の方に向き直った。

エ「シル、俺の、俺たちの銀時計をお前に託してもいいか？」

ロ「おい鋼の。血だけでも・・「いや、いいです」！」

シ「父さんの思いなんだ。この血も、彫った文字も、父さんや、アルおじさんや、大

総統

から受け継いだもの。だったら・・・」

エ「なんだ？」

うん、決めた。

この心を、明かした。

シ「背負うしかないじゃないか！」

エ「ああ！おれの思いを背負って、暴れてやれ！」

シ「いいねえ！そのおもつ苦しい感じ！」

父さんから託されたものとやらを、

背負ってやろうじゃないの！」

エ「そうだ！正解だ！鋼玉の錬金術師！」

後日・・・

大総統執務室に呼び出された。

ロ「鋼玉の錬金術師！」

シ「はい！」

ロ「早速だが、錬金術をすぐに発動させるものの発明、これを、

来年の研究テーマとする！」

なんだよそれ！

んなのあんのか？

まあいいや・・・

ガンバロ・・・

と思ったら、

ロ「ちなみに、次の査定は、来週中だ。」

は!? 大総統さんやあ・・・

ふっざけんなあ！

怒りを辛うじて隠しながら、リゼンブルへ帰った。

## 第四話 旅の始まり

シルside

え「おにーちやーん！」

恥ずかしくないのかね俺の妹は。

シ「あのなあ・・・」

俺は、査定のことと忙しいの！あんたにかまつてる暇なんぞないの！」

え「査定、ねえ・・・」

人事みたいに言うな。

え「だったら、これでいいんじゃない？」

さつき大總統と話した時には思い出せなかつたが、そう、父さんのもとで

錬金術を習っていた時に、少しずつ構想を練っていたそれ。

つて・・・

シ「こんなのポンつと出せる奴いるか！」

え「いるよー、ここに」

・・・なんちゅー妹だ：

大總統執務室

ロ「やあ、鋼玉の。」

シ「査定、間に合いましたね。」

ロ「まったくもって不本意だ。」

君なら鋼ののようにガッツリ遅れて来るものだと思っていたのだが。」

シ「じゃあ、リゼンブルに帰っていいですか？」

ロ「いや、それも困る。」

話は変わるが、鋼のに聞いたぞ。

レポートなしだったな。まったく、どんな大層なものかできたんだ？」

シ「内容知らないの上から目線やめてください。」

ロ「ほう、大した度胸だ。」

では口頭で説明したまえ。良ければ合格だ。」

シ「はい。」

まず、この錬成陣を見てください。」

口「六芒星か。しかし、これだけでは何の意味も持たないものになるぞ。」

シ「いえ、錬金術における六芒星は、全ての構築式に当てはまります。

物質一つ一つには、専用の構築式があり、術者はそれに似た物を使います。

一人一人構築式が異なっても錬成が可能なのはこのためです。

また、これは、自分の手で円を作り、ものに触れて、錬成を行使する・・・

父さんがやったのと同じ事が可能です。

しかし、あくまで一つの媒体にすぎないので、実力以上のものの錬成は

不可能です。」

口「いや、まったくもって見事だ。合格とする！」

さつきまで不審そうな顔をしていた大総統は、なんの曇りもないようなすがすがしい

顔になっていた。

かくして俺は、人生初の査定に受かったのである。

リゼンブルー

シ「アル・・・おじさん？」

いま、アルおじさんに衝撃的な言葉をかけられた。

ア「シル君、国家錬金術師になるのは構わない。

でも、心までは軍に売らないで・・・

兄さんみたいに、突っぱねちやっつけていいから・・・」

いや、処世術というものだろう。

おじさんは、軍に心を売りかけた俺にきづいていた。

敬語使ったり、敬礼したり、気に入らなくても黙って従ったり、

でもおじさんに言われて気づいた好きに旅していいってこと。

心までまじめに売らないでいいってこと。

何かが吹っ切れた俺は、本来の目的に向かう決心をした。

## 第四話 アエルゴへ？

ロ「・・・ということ、アエルゴに生きたまえ。」

シ「はあ・・・」

アエルゴ国境 ダブリス南端

ブレダ「ようシル！」

シ「ブレダ大尉！」

何だかんだあつて、アエルゴ付近に来たシル。

シ「で・・・なんで大尉がここにいるんだ？」

注)シルとエドの口調が同じになっております。

そこからへんヨロです(^^)／

ブ(ズゴツ)

シ「いや、ずっこけなくてもいいだろ。マジで知らないんだから。」

ブ「いや、俺、南方司令部の副司令官の補佐・・・」

シ「あいつ変わらずややこしいな・・・」



ブ「まあいいや・・・じゃ、アエルゴに行きますかい、シル。」  
シ「おう！」

―二日前―

ジリリリリン！

エルリック家に響き渡る電話の着信音。

エ「あいあい、こちらエルリック―」

間延びした声。

ロ「やあ鋼の。」

エ「クソ大佐あ！何の用だ。」

ロ「アレ、やってくれんかね。」

鋼玉のがアエルゴに行ったんでね。」

エ「出国許可しなけりやよかつたじやん。」

ロ「・・・そういうわけにもいかないのが大總統という仕事なのだよ。」

エ「はあ、わかつたよ。」

ロ「じゃ、切るぞ。」

エ「お、おい！んだよそれだけかよオ！」

ロ「うるさい！」

受話器を叩きつけるロイ。

ロ「ふう、相変わらずうるさい奴だな。

・ ・ ・ 青の！いるか！」

ゴ「ダ」なんですかね。先ほどからここにいましたよ。」

ロ「そりや気が付かなかったな。」

ゴ「で、ご用件は？」

ロ「鋼のを呼んできてくれんか。」

エ「いや、ここにいるぞ！」

いつの間にか、ドアの前に腰かけていたエド。

ロ「呼んでいなかったよな？」

エ「あの大佐殿があれだけで電話を切るとは思えなくてね。

この鋼の錬金術師様が飛んできてやったんだよ。」

ロ「借りは作りたくなかったのだが・ ・ ・

まあいい、感謝するぞ。鋼の。」

エ「で？こっちの人は？」

ゴ「やあ、鋼の錬金術師君。青の錬金術師、ゴータ・レイだ。よろしく。」  
エ「あいあい。」

ロ「では、本題に戻ろうか。」

そうして、3人の話し合いが行われた。

アエルゴ北方 サニータウン

シ「ここにあるのか？父さんの研究資料が。」

そう、シルがここに来たのは、大總統に父の研究資料があることを聞いたからだだった。

ブ「ああ、「北方国立図書館」にある。」

シ「ふう．．．行きますか。」

．．．．．

シ「……つて、一週間くまなく探しても見つからないじゃないじゃんか！」  
ブ「ううむ……そんなはずは……」  
考え込むブレダ。

そこへ、パリつと青い稲妻―エドの錬成光―がどこからともなくあらわれ、紙がひらりと落ちてきた。

シ「……手紙？」

開くと、こう書かれていた。

「ようシル。残念だがもうここにはない。

持って行つちまった。

我が家の地下を探せ。そこに探し物はある。

鋼の錬金術師 エドワード・エルリック」

軍用の便せんで書いたのか、文字の後ろに軍旗が描かれていた。

ブ「はあ、リゼンブールに戻るしかないな……」

シ「父ちゃん！ナロー！」

リゼンブルー エルリック家

エ「間に合ったあ・・・ふう。」

ウ「何やってたの？エド。」

へとへとになっているエドにウインリイが訪ねる。

エ「・・・遠隔錬成。今回は特に隣の国だったからなあ。疲れたア。」

ウ「なーに、また錬金術。で？何やったの？」

エ「フフン、あと30分もすればわかるさ。」

ウ「？」

## エドが錬金術？

ゴ「ダとロイとエドは、その部屋で話していた。

エ「無理だつてんでろ！」

「……もう使えねえんだよ。錬金術は……」

ロ「方法はある！君は鼻から否定する奴ではなかつただろう？」

エ「それは力はあつたからだ！」

真理の扉がない人間は錬金術が使えないのは知ってるだろ！」

ゴ「でも遠隔錬成ができるのは……可能なのは……

君だけなんだよ。」

エ「でも！」

ロ「とりあえず聞け！この馬鹿！」

ロイの怒号に驚いたエドは思わずだまる。

エ「……わかつたよ……」

ロ「では方法を説明しよう……」

エルリック家

ウ「そういえばエド、どうして錬金術使えたのかしら・・・?」

エドが立ち去ったその部屋で、ウインリイは一人疑問を抱き、シルも汽車の中で同様の疑問を抱いていた。

―大総統執務室―

ロ「これだ。」

ロイが差し出したそれは、かつてのエルリック兄弟が探し求めていたものによく似ていた。

エ「賢者の石!」

ロ「に見える錬成陣だ。」

エ「は?」

ゴ「私の査定で出した研究成果だよ。」

その石は、とても錬成陣には見えなかった。

ゴ「かつて国家錬金術師だった君は知っているだろう。」

銀時計は術法増幅器だと。」

エ「知ってるよ。」

ロ「では、それが“フラスコの中の小人”が所持していた賢者の石からできていたことは知っているかね?」

術法増幅をさせるにも、それと同等の代価が必要。

そのための代価は・・・わかるな？」

エ「そんな！俺は無意識に人間の命を使っていたのか！

あつてたまるかよ・・・」

ロ「残念だが、本当だ。だが安心しろ。

鋼のの銀時計―シルに託した時計からその部分は抜いてある。」

エ「そうか・・・少なくともシルはそれを使わないでいるってことか。」

安堵する。

ロ「本題に戻ろうか。これはな、「錬成力をため込むシロモノ」だ。」

エ「電池みたいな？」

ゴ「まあ、そういうことになるな。

で、私の予想だが、「二度真理の扉を開けたロイの力を、これを媒介に使える。」

ことが可能だと思うのだよ。」

ロ「すでにこの石には私の力がためてある。

だが、鋼のは錬金術が使えない身。体力の消耗が激しいから気を付けて

使いたまえ。あと、石が使えるのは一日2回だ。」

エ「一時的なものってことか。うっしや！引き受けた！」



ロ「二日後にアエルゴの国立北方図書館に例の手紙を遠隔錬成しろ。  
頼んだぞ。」

そして現在……

シ「ただいまー。」

エルリック家に再びかえって来たシル。

エ「おう！帰ったか！」

シ「父さんだろ？アレを錬成したの。」

と、例の手紙をひらひらさせる。

エ「ーなんで分かった？」

シ「大總統は赤、アームストロング准将は緑、その他もろもろ……

青いのは父さんだけだろ？」

一瞬間驚いたエド。

エ「くっははは！」

いきなり笑い出したエドにシルは驚く。

エ「悪いわい。いや、観察力すげえなって。」

シ「で？なんで父さんが錬金術使えるの？」

エ「えつと・・・それはだな・・・なんとというか・・・」

大總統にも、シルには言わないでくれ、と自分から頼み込んでおいて  
いうわけにもいかなかった。

シ「ま、もしかしたら父さんと同じ錬成光の人いるかもしれないしね。」

エ「お、おう。そうじゃないのか？」

―その晩―

シ（父さんが持ってた赤い石・・・賢者の石ではなかった。

アレは・・・なんだ？）